

目的 日本の家族は急速に変化し、今や核家族を中心とする欧米的外部構造をもつてゐる。これに伴い内部構造も激しく変質したが、欧米の場合とは本質的に異なる性格を備えており、中でも直系家族と相同関係にあることは無視できない。すで報告した40代夫妻の家族につづき、30代夫妻家族について、形態と勢力関係の一般的傾向を直系家族との関係において調査し分析した。

方法 西日本各地の30代夫妻、380家族について昭和55年2月突態調査をした。調査内容は、外部構造に関しては、家族構成、老親との関係など10項目について、勢力関係に関しては、家庭内の重大事の決定、日常事の決定について、それぞれ4項目ずつを調査、夫を中心に測定した。分析は、都市部、市部、郡部と3地域に大別し、家族形態は核家族、直系家族にわけて整理し、データを $\chi^2$ 検定、t検定により統計処理、分析した。

結果 核家族率は、都市部に高く(73%)、郡部に低い(46%)が、将来老父母と同居する予定のある家族は、都市部においてさへ34%を示し、親と30代夫妻とは互いに信頼し、依存する気持もかなりつよい。勢力関係は全般的に夫優位であるが、いづれの家族も40代夫妻の家族に比較すると、夫と妻の間に勢力の差は小さく、いわば現代的合理性に基づく勢力と、多少家父長的な勢力とが同居した感がある。老父母の勢力は大きなものではなく、ことに伝統的制度的な力関係は存在せず、きわめて役割分担的な勢力関係傾向がみられる。しかしこれによつて夫・妻の同一性は減少してゐると考へられる。